

# 社会科学における用語の定義について

——ウィトゲンシュタイン・「家族的類似性」の観点から——

佐藤由美子

## 1. 問題の所在

社会科学の論文を書く際に、おそらく避けて通れない前提の一つとして、論文の中で使用する用語や操作概念の意味を明晰にするということがある。論文の書き手が自分の使用する用語を不確定に使用している場合には、他の研究者との共通の議論は不可能となってしまう。従って、研究を他者に理解しやすくするためにも、また学者の共同体の中で研究を進展させるためにも、研究上重要な専門用語 (technical terms) の定義が必要だといふのである。

だが、このような用語の意味を正確に確定しようとする慣習は、それ自体、別の混乱を引き起こすこともあり得る。

例えば、地理学で使用されるドイツ語の *Landschaft*、及び英語の *landscape* などは、その典型であろう。それらは、通常「景観」などと訳されているが、それをいかに定義するかについて、論争を呼んできたのはよく知られている事柄である。これらの語の定義の変遷についての詳細な検討は既になされているので、ここでは繰り返さない (例えば、山野 1998 参照のこと)。が、それらの語をめぐる混乱が生じた事情を行論上確認しておこう。その理由は、もともと「ラントシャフト “*Landschaft*” という術語」が「曖昧」(下線筆者、以下同じ)であったことと、「*Landschaft* と *landscape* を同義語とした」ことにあった。具体的には、「ドイツ語の *Landschaft* が情景 *scene* か、地域 *region* かの双方を意味しているのに、英国と米国では単に一つの *landscape* として紹介された」からだ (以上、ハーツホーン 1975 訳: 3-4)。つまり、その混乱は、「元来の英語 *landscape* のもつニュアンスが、ドイツ景観論の *Landschaft* の中に内包された意味といくぶん齟齬するところがあったために」生じたといふのである (山野 1998: 19)。

同様の混乱が、日本語の「地域・地方・地区・地帯・領域」という用語についても起こっている。これらは、「英語の *region*・*area*・*district*、フランス語の *domaine*、ドイツ語の *Landschaft*・*Gebiet*・*Landteil* など」の用語の訳語でもあるため、邦訳を用いるか、原語を取るかは研究者の判断に委ねられてきた。しかも都合の悪いことには、それらが「地理学にとって基本的な概念の一つである」にもかかわらず、「その厳密な意味は必ずしも明確ではなく、ただ単に『場所』とか『所』といったほどの軽い意味で用いられる場合も多い」(以上、木村 1984: 35)。そこで混乱を避けるため、以下のような定義を行うわけである。

一例を挙げれば、「地域 (Area)」とは「歴史的には地球表面上における文化の発展とともに変化しており、空間的には他の場所と区別されながらも、また他の場所と深いつながりを持ち、[他の場所と近似した場所の関係において空間的に結合した]「一定の広がりをもつ」ものである」とか (堀口 1988: 2)、または「地表面のある特質を有したまとまりのある領域」で、「狭い範囲から広い範囲までさまざまなスケールが存在し」、「可視的なものと否とを問わず、自然的・人文的すべての要因が地表面の一定の広がりの中に構成する複合体である」(高橋 1995: 43) といったように。

こうして、個々の研究者、個々の論文において、定義が乱立することになってしまい、議論の確実さを目指して始められた定義が多様化し複雑化するにつれて、かえって研究者間の議論の土台を崩壊させてしまいかねないほどになる。

ところで、なぜ社会科学者たちは、執拗に定義を行おうとするのであろうか。筆者には、その根本的な理由の一つは、社会科学という学問の出発点にあるように思われる。

社会科学は、その出発点より、「自然科学の方法モデルに従って」「科学としての形態を整え」

ることで、自己を確立しようとした（高島1968:34）。つまり、多かれ少なかれ、社会学者は自然科学の方法論を理想とし、それを模倣すべく努力してきたといえるのである<sup>1)</sup>。経済学にしても、社会学にしてもそうであろう（高島1968, 小室1971, Giddens1989: 21-22）。社会科学が自然科学を追従せざるを得なかったのは、社会学者が自己の学問を自然科学に比して、曖昧であると認識していたからだといえよう。社会科学で用いられる用語は、自然科学で用いられている数学の記号と異なり、不確定で一義的な把握が不可能である。そこで、用語を正確に定義することによって、自然科学、とりわけ数学におけるような正しい推論を可能にしようと考えたのであった。

このような見解の近代初頭のものは、ホブズ（Hobbes, Thomas）に顕著に見られる。ホブズは、「幾何学」を「神がこれまでに人類に与えてくださった唯一の科学」とし、その方法を讃美している。幾何学は、「計算のはじめに」、そこで使用する「語の意味を決定すること」、すなわち「定義 (Definitions)」」することで、「あいまいさを、けしさりし、」「正確な真実を探求し」していると考えたのであった。誤った語の意味をずっと使用していると、計算が進行するにつれてその誤謬も大きくなり、最終的には、最初から計算し直さなければならない。つまり、「まちがった定義あるいは定義の欠如」からは、「すべての虚偽で無意味な教説がでてくる」。それ故、「名辞のただしい定義」を行うことによって、「科学」的現実さを「獲得」しようと考えたのである。また彼は、推理も幾何学と同様の性格を持っているとみなした。推理の誤りを防ぐには、「以前の著作者たちの定義を検討して、それらが不注意に下されているばあいに訂正するか、あるいはみずからそれをつくるか、どちらかをするのが」必要であるという（ホブズ訳1954:75-76, 93）。つまり、ホブズは、数学の現実さを、はじめの段階での用語の定義によって獲得しようとしたのである。

このように、自然科学の方法論を自己の学問のモデルに据えることによって、社会科学はその当初から確固とした基盤を得ようとしたのであった。その極端が、今世紀の初めに哲学から起こった論理実証主義（Logical Positivism）の運動であろう。科学的方法によって哲学を再構築しようとしたのである（例えば、エイヤー1955訳, 大森1964参

照）。この論理実証主義に影響されて、1950年代以降、地理学においても「地理学革命」とも呼ばれる計量地理学が台頭したのであった（野沢1984: 23-31）。

しかしながら、社会科学の理想的なモデルとみなされていた自然科学の優位性は、既に動揺している。特に、分析哲学の分野から指摘された問題は、決定的だと筆者には思われる。それによると、「物理的対象と神々とのあいだには」、つまり科学で取り扱う対象と神話の中に登場するものとの間には、「認識論的に」は「程度の差があるだけであって、両者は種類を異にするのではない」（クワイン1992訳: 66）、という。この「経験主義のふたつのドグマ」と題された論文におけるクワインの考察は、地理学において論理実証主義がまだ隆盛を極めていなかった1951年に既に書かれていたが、このクワインの論理を突き詰めると、次のような見解に到達するのである。すなわち、「科学／文学／哲学という知的ジャンルの間には、それらを言明の体系として見る限り、明確な境界線は存在」せず（野家1996: 243）<sup>2)</sup>、科学でさえも物語行為にすぎない、というのだ（野家1996: 217-244）<sup>3)</sup>。

前述したような、地理学における用語の定義も、おそらく自然科学の方法論を模倣したことの現れであろう。またこのような傾向は、地理学だけに留まらない。社会科学の全分野のみならず、人文諸（科）学においてさえ同様であったのである。例えば、日本文学の領域においては、卒業論文の段階で、統計的分析を試みているものも多数みられる（例えば、佐々木1993, 清子内親王1993, 村松1997など）。

けれども、それらが自覚的であれ無自覚的であれ、理想として仰いできた自然科学は、もはや確固たる優位性を有していないのである。ならば、社会科学における慣習も、再考されてしかるべきであろう（拙稿1996参照）。

本稿では、以上のような問題関心から、定義による現実さについて考えてみることにしたい。これによって、「ポストモダンの」思考の一端が明らかになるはずである<sup>4)</sup>。また、従来「ポストモダン地理学」として提出されてきた諸研究が、実は「モダンの」範疇にとどまっているということも理解されるであろう。

## 2. 「家族的類似性 (family resemblances)」 について

社会科学が自然科学の方法論を模倣しようとする際、背後にはそのような考え方を裏付けるような言語観が存在した。アリストテレス以来、永きにわたって前提とされてきた、また現在でもほとんどの人々に受け入れられている言語観である。それは、(1) ことばが事物と対応しており、ことばは事物の「表象 (representation)」である、(2) それ故、ある言語と他の言語との間の意味のずれは、語とそれを指し示すもののがずれていることから生ずる、すなわち語の外延 (extension) は一致しているにもかかわらず、語の内包 (intension)・意味の異なっていることが用語の混乱の理由だ、というような言語観である。筆者は既に(1)については検討済みであるため(拙稿1996)、ここでは(2)についてのみ考察したい。

簡略化していえば、一般的に、語、あるいはその語が表す概念には、外延と内包がある。外延とは、その概念が成り立つ対象の集合のことである。個体の場合に限定して考えれば、外延はそれを指示する対象のことをいう。また「内包」とは、一般的に語の「意味」と我々が呼んでいるものであり、外延の全要素に共通している条件のことである。これをまとめると、次のようになるであろう。ある概念には、その概念が成立する対象の集合  $M = \{a, b, c, d, e, f, g\}$  が存在し、集合  $M$  の要素は、ある共通の必要十分条件  $f$  を満足しているものと考えられる。これを、 $M = \{x \mid fx\}$  として記述すると、 $M$  は条件  $f$  を満足する  $x$  の集合をあらわしている。具体的には、 $M = \{a, b, c, d, e, f, g\}$  である。この  $M$  を「外延」、 $f$  を「内包」という(黒崎1977: 46-47参照, 図1参照)。

例を挙げよう。「人間」の外延は、人間全てからなる集合であり、その内包は、「二本足で立つ」「哺乳動物」「言語を話す」など、人間の持つ様々な性質となるであろう。また、「虎」に関していえば、外延は虎全てからなる集合で、内包は「猛獣」「肉食」「ネコ科」「体の上部には黄褐色の地に黒い横縞がある」「腹は白い」等、ということになる。「赤い」という語の外延は赤いもの全てからなる集合ということになり、内包は「赤い」が表す性質のようなものとなる(『哲学・論理用

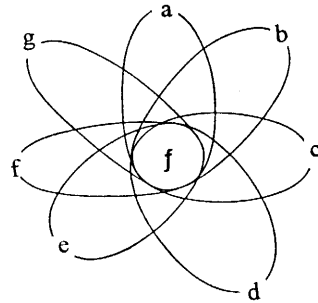


図1 (黒崎 1977: 47参照)

語辞典』1991: 204-205, 山本・黒崎編1993: 141-142, 丹治1997: 16参照)。従って、定義を与えるということは、ある外延に対して、内包を列挙するという他にない。「人間」の定義は、例えば、「二本の足で立ち、言語を話す哺乳動物」というようになるであろうし、また、「虎」の定義は、「肉食のネコ科の猛獣で、体の上部には黄褐色の地に黒い横縞があり、腹は白い」となるであろう。

この考えに依るならば、「明けの明星」と「宵の明星」は、「金星」という同一個体を指し示しているため、外延を等しくしているとみなしうる。しかしながら、一方は明け方に見られ、他方は夕方に見られることから、その意味、すなわち内包は異なっているといえよう。このように、外延は同じだが、内包は異なるという場合もあり得るのである。

以上の言語観を、地理学で使用されている *Landschaft* の事例に当てはめると、次のように説明できよう。*Landschaft* と *landscape* は、外延を同じくしてはいるが、その内包は異なっている。従って、定義が異なるため、研究上の混乱が生じている。よって、我々は明確な定義を行うことによって、その誤解をなくすようにしよう、と。

だが、このような「アリストテレス以来の形式論理学の『概念論』は」、ある意味で「ウィットゲンシュタインによって完全に否定され」てしまったのである(黒崎1977:48)<sup>9)</sup>。彼はどのような観点から、それを行ったのであろうか。ウィットゲンシュタイン (Wittgenstein, Ludwig) が『哲学的探求 (Philosophische Untersuchungen, Philosophical Investigations)』の中で述べている「家族的類似性」という考え方を辿ることによって、確認して

みたい。

ウィトゲンシュタインは、「ゲーム」ということばを例にとって、ことばの特徴を考えている。「ゲーム」といえば、「盤ゲーム、カードゲーム、ボールゲーム、格闘ゲーム、等々」が思い起こされるが、「これら全てに共通し」たものとは、一体何であろうか、と。つまり、「ゲーム」という概念の内包を考えてみようというわけである。そこでまず、「盤ゲーム」をよくみってみる。すると、「盤ゲームに於ける多くの共通な特徴」が見いだせる。次にカードゲームをみる。「盤ゲームとの多くの対応物を見出すが、しかし盤ゲームに於ける多くの共通な特徴は消え失せ、別の特徴が現れている。「ボールゲーム」についても同様のことがいえる。とすると、一体何がそれら全てに共通する核であるといえるのか。

彼は具体例を一つ一つ挙げながら、それに対して反論を加えていく。例えば、それは「『娯楽』であろうか?」。しかし、「チェスは必ずしも娯楽」とはいえない場合がある。それでは、「勝敗」や「競争」であろうか。いや、そうではない。「独りトランプ」や「子供がボールを壁にぶつけて跳ね返ったそれを受け取る」ようなゲームの場合には、「勝敗も競争も無くなっている」。それならば、ルールこそがゲームの本質ではないか<sup>6)</sup>。それも違う、「子供の積み木遊び」に、ルールと呼べるようなものが存在するであろうか<sup>7)</sup>、といった具合である。

このようにしてウィトゲンシュタインは、「ゲーム」というもの全てに当てはまるような「ゲーム」の核心、つまり内包(概念の本質)をつかみ取ることは不可能だと結論づける。そして、我々が内包だとみなしているものはむしろ、「家族のメンバーの間に成り立」っている「体格・顔つき・眼の色・歩き方・気質」といった「多種多様の類似性」のようなものと述べるのであった。夫婦はもともと他人であるから、類似性はあまりないかもしれない。しかし、長男は眼の形と体格が母親に似ているとか、長女は口元は母親に似ているが、気性は父親に似ているとかいったように、その子供たちは両親の持つ特性を少しずつ受け継いでいる。そして、家族全員の特徴は完全に重なることはないとしても、「相互に重なり合い交差しあっている」のである。このような類似性のことを、ウィトゲンシュタインは、「家族的類似性

(Familienähnlichkeit, family resemblances)」と呼んだ。

これと同様に、「ゲーム」ということばも「家族的類似性」をなしているのであって、「ゲーム」という概念のはっきりとした境界はない。その境界はぼやけているのだ。従って、「ゲームとは何であるかを」、「他人に」対しても「自分自身」に対しても、「正確に言う事は出来ない」。また、「或る概念に境界を引く人が、その概念を使用可能にするわけで」もないのである(以上、Wittgenstein 1967: 31<sup>a</sup>-42<sup>a</sup>・1997訳: 55-75)。

以上のようなウィトゲンシュタインの考察が意味しているのは、ことばには、「本質」のようなものではなく、またその境界も引けないということであろう。つまり、ことばには内包もなければ、外延もないわけである。

さて、ここに至って、我々は当初の定義の問題に立ち返ることができる。我々が研究をより厳密なものとするために行ってきた用語に対する定義は、実のところ、それ自体にたいした意味はなかった。というのは、Landschaft, landscape, scene, region, area, district, 景観, 地域・地方・地区・地帯・領域等のことばは、「家族」のように重なり合っているだけであり、その明確な境界線は引けないからである。定義はあくまでも社会科学を自然科学に近づけようとする「モダン」的な思考のあらわれなのであって、ある意味で定義から出発するという学問のあり方自体を見直す地点にまで、我々は到達してしまっているのである。

### 3. 「モダン」から「ポストモダン」へ

以上述べてきたように、ウィトゲンシュタインの「家族的類似性」の考え方によって、定義を行おうという試み自体が、既に「モダン」の範疇に留まっていることの証であることが明らかになった。語の意味、語の本質、語の内包と外延を論理的に突き詰めようとする、その試みは失敗することとなる。研究者の行っている定義という行為が、そもそも定義不可能なものに定義を与えよう、無意味なふるまいになってしまうからだ。

が、確認しておきたいのは、筆者は定義が「モダン」的なものゆえ、撤廃すべきだと主張しているのではない。プラグマティックに考えれば、定義が研究上有効であるとみなされる場合には、そ

れを行っても差し支えないであろう。つまり、研究上、それがどれほど効果的かということが問題なのであり、それは数学の定義が計算上の有効性によって、効果を確認得るのと同様である。ただ本稿で、定義という些細な慣習にも「モダン」の思考が反映されているということ、またそのような慣習に立脚した人文・社会科学のあり方を見直すべき時期に来ていることを、示したかっただけなのである。

さて、以上の見解に対して、以下のような反論も成り立つであろう。つまり、自然科学的方法論への反発は既に現象学的研究という形で提出されており、「モダン」の範疇を越えるような試みはなされつつあるのだ、と。例えば、ギデンズ(Giddens, Anthony)は、自然科学を範型とするような素朴(naïve)な実証主義的社会学が成り立たないことを指摘している(Giddens1989: 21-22)。社会学では、自然科学的方法論に対する反省として、現象学的社会学が生まれた。もちろん地理学にもその流れはあり、実証主義批判を展開した現象学的地理学の研究があるではないか、と。

しかしながら、それが実証主義的な方法論を採っていたことは、既に別稿で指摘したとおりである(拙稿1996: 21-22)。つまり地理学においては、現象学的研究は科学的な観点を無自覚に取っており、社会学や人類学のエスノメソドロジーと比べた場合、ある意味で不徹底な研究だったのである<sup>8)</sup>。さらにいえば、現象学的研究自体が「モダン」の枠組みにあるように、筆者には思われる<sup>9)</sup>。

どうやら「ポストモダン」的思考によって暗示されているものは、「これが地理学である」とか、「これは地理学ではない」とかいう区別が、もはや有効ではなくなっているという事態なのかもしれない。なぜなら、「地理学の本質」といった内包もなければ、「地理学」という外延も既になからである。つまり、現代において制度上分類されている学問領域における区別を別にすれば、「地理学」の独自性は、もはやないということであろう。我々は、制度的な枠組の中で単に「地理学」という物語行為を遂行しているのである。それは本来、道徳的(moral)でも非道徳的(immoral)でもなく、没道徳的(amoral)なものでもない。

#### <註>

- 1) 社会科学にも自然科学の方法論をそのモデルとすることに、反発する時期は存在したし(高島1968: 34)、現在でもある(Giddens1989: 21-22)。しかし本稿で述べるように、いかに自然科学の方法論に反発しようとも、論文中で用語の定義を行うこと自体、まさに自然科学の方法論を模倣していることを表している。
- 2) これについては、第5回お茶の水女子大学地理学セミナー(1997年6月25日)において、「実証主義的地理学の可能性—言語論的転回>の視点から—」と題して発表した。
- 3) これについては、「他者理解の終焉と『物語としての他者理解』—『ポストモダンの地理学』への序章—」と題して、1998年度人文地理学会(1998年11月15日、於京都大学)にて、一部発表した。
- 4) 「ポストモダン」、及び「ポスト構造主義」についての一般的な知識を得るには、イーグルトン1985訳、Barry1995、大橋1995などが、よくまとめられていて便利である。
- 5) 別の観点からではあるが、クリプキ(Kripke, Saul A.)も定義の困難を指摘している(クリプキ1985訳)
- 6) 社会科学の諸分野でよく参照されるウィンチ(Winch, Peter)は、ルールという概念が本質であるとみなし、社会科学をそれによって基礎づけようとした(ウィンチ1977訳)。橋爪大一郎も、ウィンチに依拠しているとみなしうる(橋爪1985)。が、ウィンチ的な「規則」の把握には問題があるように思われる(クリプキ1983訳参照)。この問題は、紙幅の都合上、別稿で検討することにした。
- 7) この「子供の積み木遊び」の事例のみ、黒崎1977:43を参照した。
- 8) カスタネダ1972訳の、場所に対する体験の記述と、地理学の論文のそれとを比較してみればよいだろう。
- 9) フッサール(Husserl, Edmund)の『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』をみると、彼が目指したものが、デカルト以降見失われたものの再構成であったことがわかる。

#### <参考文献>

- エイヤー, A. J.(1955): 『言語・真理・論理』吉田夏彦訳, 岩波書店
- BARRY, Peter.(1995): *Beginning Theory—An introduction to literary and cultural theory*—, Manchester University Press.
- カスタネダ, カルロス(1972): 『呪術師と私—ドン・ファ

- ンの教え』真崎義博訳, 二見書房
- イグルトン, T. (1985): 『文学とは何か』大橋洋一訳, 岩波書店
- フッサール, E.(1995): 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫・木田元訳, 中央公論社
- GIDDENS, Anthony.(1989): *Sociology*, Polity Press.
- ハーツホーン, R.(1975): 『地理学の本質』山岡政喜訳, 古今書院
- 橋爪大三郎(1985): 『言語ゲームと社会理論—ウイトゲンシュタイン・ハート・ルーマン—』勁草書房
- ホップズ, トマス.(1954): 『リヴァイアサン (一)』水田洋訳, 岩波文庫
- 堀口友一編著(1988): 『新版地理学概論』古今書院 (改訂新版, 初版1964)
- 木村辰男(1984): 「地域概念」, 木村辰男・坂本英夫・高橋正編『現代地理学の基礎<第二増補版>』大明堂: 35-41
- 小室直樹(1971): 「『社会科学』革新の方向—田無夜話—」, 加藤周一・久野収編『戦後日本思想体系10 学問の思想』筑摩書房:134-168
- クリプキ, ソール A.(1983): 『ウイトゲンシュタインのパラドックス—規則・私的言語・他人の心—』黒崎宏訳, 産業図書
- クリプキ, ソール A.(1985): 『名指しと必然性—様相の形而上学と心身問題』八木沢敬・野家啓一訳, 産業図書
- 黒崎宏(1977): 『科学と人間—ウイトゲンシュタインのアプローチ—』勁草書房
- 村松佳奈子(1997): 「八代集における『夕暮』の歌について」『学習院大学国語国文学會誌』40:57-67
- 野沢秀樹(1984): 「新しい地理学」, 木村辰男・坂本英夫・高橋正編『現代地理学の基礎<第二増補版>』大明堂: 23-31
- 野家啓一(1996): 『物語の哲学—柳田國男と歴史の発見—』岩波書店
- 大橋洋一(1995): 『新文学入門』岩波書店
- 大森莊蔵(1964): 「論理実証主義」, 碧海純一・石本新・大森莊蔵・沢田允茂・吉田夏彦共編『科学時代の哲学1 論理・科学・哲学』培風館:67-98
- クワイン, W.V.O.(1992): 「経験主義の二つのドグマ」『論理的観点から—論理と哲学をめぐる九章』飯田隆訳, 勁草書房: 31-70
- 佐々木優子(1993): 「歌語『しぐれ』について—万葉集及び八代集における時雨の歌の考察—」『学習院大学国語国文学會誌』36:55-72
- 佐藤由美子(1996): 「地理学再検討のための視座—ウイトゲンシュタイン・<言語ゲーム>論をめぐる—」『お茶の水地理』37:11-26
- 清子内親王(1993): 「八代集四季の歌における感覚表現」『学習院大学国語国文学會誌』36: 37-54
- 思想の科学研究会編(1991): 『増補改訂 哲学・論理用語辞典』三一書房 (増補改訂版, 初版1959)
- 高橋伸夫(1995): 「文化地域とは(その1) 等質的な地域と機能的な地域」, 高橋伸夫・田林明・小野寺淳・中川正『文化地理学入門』東洋書林: 43-61
- 高鳥善哉(1968): 「社会科学の成立」, 中村秀吉・古田光編『岩波講座哲学XII 科学の方法』岩波書店:31-56
- 丹治信春(1997): 『クワイン—ホーリズムの哲学』講談社
- 山野正彦(1998): 『ドイツ景観論の生成—フンボルトを中心に—』古今書院
- 山本信・黒崎宏編(1993): 『ウイトゲンシュタイン小事典』大修館書店 (三版, 初版1987)
- ウィンチ, ピーター.(1977): 『社会科学の理念—ウイトゲンシュタイン哲学と社会研究—』森川真規雄訳, 新曜社
- WITTGENSTEIN, Ludwig.(1967): *Philosophical Investigations*, Translated by G. E. M. ANSCOMBE, Blackwell. (Third edition., First edition1953) =(1997): 『「哲学的探求」読解』黒崎宏訳・解説, 産業図書 (邦訳はドイツ語からのもの)